

「大河ドラマ：鎌倉殿の13人」 埼玉県民として押さえておきたい " 常識 " (下) 鎌倉殿の13人と武蔵武士団

メインストリート・マネジメント・リサーチ合同会社 代表・地域経済アナリスト 松本 博之

1. 頼朝の挙兵と鎌倉幕府の精鋭部隊へ

◆「打倒、頼朝」に走る武蔵武士団

1160年の平治の乱以後、約20年間にわたって武蔵国は平家の知行国となり、武蔵国留守所総検校職を継承していた秩父氏一族を始めとする武蔵武士団は、平家と密接な関係であったと考えられます。彼らにとって最も重要な仕事は領地を守ることです。そのためには、これまでの長い源氏との関係に代わって平家の軍門に下ることはやむを得ないことだったのです。中でも畠山氏は平家と関係が深く、頼朝が挙兵した時は、畠山重忠の父重能や叔父の小山田有重が大番役として在京しており、頼朝挙兵後もしばらくは平家方として戦っていました。

重忠も「平氏の重恩を報ぜんがため」(吾妻鏡より)と、秩父一族や武蔵七党などの武蔵武士団は頼朝軍と戦ったのです。頼朝軍が惨敗した「石橋山の戦い」では、頼朝打倒に加わった武蔵武士団の中に、前号(上)でもその活躍にふれた熊谷直実も参戦しています。その際に頼朝方の三浦軍と畠山重忠率いる軍勢が由比ガ浜で偶発的に遭遇して、重忠は50人という大量の郎党を失いました。しかしながら重忠は河越氏、江戸氏や武蔵七党に声をかけ、今度は数千騎で三浦氏の衣笠城を攻めました。そこで重忠にとっては祖父にあたる三浦義明を討ち取り、三浦義澄らは衣笠城を放棄して、安房国に逃れ、頼朝と合流していくのでした。

◆頼朝、武蔵国入り後に重忠ら恭順、加勢する

上総・下総両国の武士団を味方につけて、再起を図った頼朝でしたが、武蔵国へ入るときの心配の種は、敵対した秩父氏を筆頭とした武蔵武士団の去就

でした。そこで、武蔵武士団の中で鎌倉への道筋を押さえていた江戸氏や葛西氏をいち早く味方に引き入れ、畠山氏や河越氏がそれに続くように算段しました。またつい先日まで戦っていた武蔵武士と三浦氏との仲裁を取り付けることで、武蔵武士団の加勢に弾みをつけました。

頼朝にとって武蔵国、武蔵武士は非常にデリケートな課題だったと思われます。彼自身、鎌倉に本拠を置くために、背後にある広大な武蔵国を非常に重要と考えていました。武力に長けている武蔵武士団の力はどうしても必要だったのです。

地政学的にも武蔵国は、

※鎌倉が東海道の安房コースと武蔵コースの分岐点をおさえる位置にある

※鎌倉から西へ軍を動かす場合、武蔵国に背後の防御をする軍を置かねばならない

※東海道から東山道への最も重要な前進拠点であったと言えます。

頼朝には、万が一の場合、武力をもって武蔵武士団を帰属させる覚悟もあったともいわれています。結果的に、武蔵国最大の武士団であった秩父一族を帰属させて、無事に鎌倉入りとなりました。1180年富士川の合戦以降、武蔵武士団は鎌倉殿の直属軍として、平家追討に向けて目覚ましい活躍をとげます。

2. 鎌倉殿の13人の実像と武蔵武士団

◆機能しなかった鎌倉殿の13人

テーマを大河ドラマへ移しましょう。物語はだいぶ進行しておりますが、そもそも「鎌倉殿の13人」とは、どういうものなのでしょうか。これは1199

年（建久 10 年）1 月急死した頼朝の後を受けて、2 代将軍となった頼家の政治能力に不安を持った北条時政が、自分を含めた有力御家人 13 人によって、頼家の政治的権限を制限するために作ったとされる合議制の仕組みです。（「吾妻鏡」には「若年（21 歳）の暗君」として描かれています。）

しかしながら、合議制とは言え 13 人が一堂に会して業務を行った事実はないこと、また頼家が暗君だったという吾妻鏡の記述にも疑問があることも指摘されています。以上から、最近の研究では、御家人たちにとって最も重要な“領地に関する訴訟”について、指定された 13 人を訴訟の受付担当とした程度のものであったとされています。実際のところ 13 人の中で 3 人が発足して半年足らずで病没や謀殺されています。また 3 年後には頼家が最も信頼を寄せていた比企能員が北条氏によって謀殺されるなど、とてもサステナブルに機能していたとは思えません。

◆鎌倉殿の 13 人の顔ぶれとその特徴

次に 13 人の顔ぶれを見ましょう。13 人をいくつかの派閥に分けることができます。まず「文官枠」です。大江広元、中原親能、二階堂行政、三善康信らは元々朝廷に仕えていて、鎌倉幕府の成立にも関わり、頼朝に請われて鎌倉にきた人たちでした。当時は御家人の中には文字の読み書きが満足にできる人が少なかったことあり、また朝廷との交渉事などを考えると頼朝、それに続く幕府としても彼らの力を活用することが必須条件となりました。

<p style="text-align: center;">文官</p> <p>中原 親能 大江 広元 三善 康信 二階堂 行政</p>	<p style="text-align: center;">北条氏</p> <p>北条 時政 北条 義時</p>
<p style="text-align: center;">反北条派</p> <p>比企 能員 梶原 景時</p>	<p style="text-align: center;">親北条派</p> <p>三浦 義澄 和田 義盛 安達 盛長 八田 知家 足立 遠元</p>

鎌倉殿の 13 人・御家人グループ 9 人のその後

氏名	死亡年月日	年齢と死因など
梶原 景時	1200 年 1 月	60 歳、鎌倉から追放後、駿河で滅ぼされる
三浦 義澄	1200 年 1 月	73 歳、病死
安達 盛長	1200 年 4 月	65 歳、病死
比企 能員	1203 年 9 月	不詳、時政による謀略死 ※武蔵武士
和田 義盛	1213 年 5 月	66 歳、義時による謀略死
八田 知家	1218 年 3 月	76 歳、不明
足立 遠元	不詳	実績不明 ※武蔵武士
北条 時政	1215 年 1 月	畠山重忠謀殺後、義時により鎌倉を追放される
北条 義時	1224 年 6 月	時政を追放し、幕府の実権を握る。第二代執権へ

（出所：各種資料をもとに筆者作成）

残りの 9 人は、主に北条時政、義時親子に近い“親北条派”と 2 代将軍頼家に近かった“反北条派”とに分けることができます。親北条派は北条氏の親戚筋に当たる三浦氏や和田義盛などです。反北条派は 2 代将軍の最側近だった比企能員と梶原景時となります。

◆武蔵武士団からは 2 名のみ選出

平家討伐の精鋭部隊として鎌倉幕府成立に寄与した武蔵武士団からは、2 名のみが鎌倉殿の 13 人に選ばれました。前述の比企能員と足立遠元です。残念ながら、彼らは畠山重忠のように“地元出身”の武蔵武士ではありません。（2 人の経歴については、（上）で記述しています。）

◆選ばれなかった武力・軍事部門

鎌倉殿の 13 人のメンバーの顔ぶれを見ますと、実力もあり、当然ながら入ってもおかしくない御家人たちが漏れていることに気が付きます。

下総代表：千葉常胤^{つねたね}、下野代表：小山朝政、そして武蔵代表：畠山重忠らです。言い換えれば平家追討や奥州征伐などの第一線で活躍した武将たちで



深谷市内の畠山重忠公史跡公園内の銅像

す。特に頼朝の信頼が厚かった重忠は、その力量や人望から入って当然とも考えられますが、合議制は政治を運営する組織のため、文官的な能力が求められた結果とも考えられます。また彼らの武力に脅威を感じていた北条時政が政治の中枢から遠ざけるために、敢えてメンバーに入れなかったという見方もできるかもしれません。

3. 武蔵武士団の鑑 畠山重忠の伝説とその最期

大河ドラマの中に描かれている武蔵武士団の武将たちの中で最も後世に名を残しているのが畠山重忠と言えるでしょう。伝説の多い武将ですが、清廉潔白、忠恕の心から、「武蔵武士の鑑」（鎌倉武士の鑑）と言われています。明治時代から「修身」の国定教科書の素材となり、清廉潔白な人物像が全国的に広まってきました。また美男子、体格も大きく力持ち、歌舞音曲にも通じていたということも、彼の伝説のイメージを膨らませているのでしょう。

重忠に纏わる伝説で最も有名なのが、平家追討の一の谷合戦での鴨越ひよどりごえの話です。義経軍に加わっていた重忠は急峻な岩場を降り、平家軍を急襲するため愛馬三日月を労わり、自らその愛馬を背負って降

りていったという話です。（※実際には重忠は範頼軍にいたため、これは作り話とされています。）

また、木曾義仲との宇治川の戦いの際に、馬を射られ上流から流されてきた味方の武将の鎧をつかんで、向こう岸までその武将を投げ上げ、その投げ上げられた武将が一番乗りの手柄をあげたという伝説もあります。また美男子で体格も良かったことから、頼朝は鎌倉入りや上洛の際には重忠に先陣を命じたと言われています。

◆重忠の最期 哀れ、北条時政に謀殺される

平家追討、奥州征伐などで武将として多大な功績をあげ、頼朝からの信頼も厚かった畠山重忠でした。北条時政の娘婿となり、北条義時とも年齢が近く親友のような間柄でもありました。しかし、その最期は哀れなものでした。義理の父である時政に裏切られ、不本意ながら義時の軍と戦い、二俣川（現在の横浜市旭区二俣川）に露と消えていったのでした。

そこに至る伏線が多々あり、まず京都に上っていた重忠の息子、重保と時政の後妻である牧の方の義理の息子にあたる平賀朝雅が宴席で激しい口論となりました。重保に深い遺恨を持った朝雅は義母である牧の方へその遺恨を伝え、それは当然のごとく夫である時政の耳に入ります。

実は重保らが上洛する途中で、同行していた牧の方の長男、政範が死亡しています。そのことにも重保が関与していたのではないかという話にまで発展してしまいます。重保にとってはとんだ濡れ衣の話ですが、こうしたことから牧の方は、重保や有力御家人でもある父、重忠にも深い警戒心をもって、時政に讒言をして畠山氏追討の計画を強引に進めていくのでした。まず1205年（元久2年）6月22日早朝、時政の命を受けた三浦義村により、謀反人として重保が討たれてしまいます。

これより先に重忠は同じ秩父一族である稲毛重成から「鎌倉で何かが起こりそうだ」という報を聞いて、ごく少数の手勢を従えて急遽、6月19日に武蔵国の菅谷の館を出発し、同日二俣川に着きました。そこで重忠はわが目を疑います。対岸には北条義時を総大将とした大軍が対峙していたのです。重忠軍135騎では勝敗の行く末は明らかでした。そこで

ようやく、既に重保が謀反人として殺されていること、そして自分も謀反人にされ、その討伐に義兄である北条義時が大軍を従えて対峙していることを知るのでした。

義時は姉、政子とともに「重忠の誠実な人柄から謀反など起こす道理は考えられない。何かの間違いではないか」として、畠山氏征伐に強く反対したそうですが、父、時政や牧の方の再三の強要に、最終的に従わざるを得なかったのでしょう。畠山重忠、享年 42 歳。伝説の武蔵武士がその生涯を終えました。

◆義時、父時政を追放

しかしながら、話はここで終わっていません。やがて「重忠謀反」は時政、牧の方の陰謀であったことが発覚します。そこで義時は父、時政を伊豆へ追放し、話の出どころとなった平賀氏も義時らによって滅ぼされることとなりました。

北条義時は父、時政を追放することで幕府内での実権を盤石なものとし、平賀氏と畠山重忠を滅ぼすことで結果的に無風状態となった武蔵国を手に入れて、相模、武蔵の両国を北条氏の「直轄領化」することに成功したのです。

ここに第二代執権北条義時が誕生し、義時は姉、政子とともに関東の武士による、武士のための政権運営を押し進めていくのでした。やがてその行く先は北条氏最大の仁義なき戦いとなった後鳥羽上皇との承久の乱へと進んでいくのです。

おわりに

◆北条義時が目指した「持続可能な武家社会」

北条義時は執権政治により鎌倉幕府の権力をわが物とすることとなりました。北条氏は鎌倉幕府内での勢力基盤を盤石にするために、言うなれば謀略の限りを尽くし、仁義なき戦いを繰り返しました。北条義時（又は北条氏）は何を目指していたのでしょうか。それは「持続可能な武家社会の実現」と言えるでしょう。

①「源氏ブランド（頼朝の御威光）」の継承

北条氏は自らが家柄も低く、小豪族の出身であるということは身に染みて感じていたと思います。そ

のために御家人たちをつなぎとめるため徹底的に利用しようとしたのが源氏ブランドであり、頼朝の御威光だったのです。源頼朝をトップに据え、自らの利益を守るためには、武力行使も厭わないという東国の武士が集まって、協力関係を築き、作り上げたものが鎌倉幕府で、頼朝という「源氏の棟梁」のブランド力が大きな意味を持っていました。そしてそのブランドの継承者として「将軍」にはならず、「執権」という形で体制を作っていたのです。特に頼朝の御威光を維持・浸透させる“唯一”の代行者であると認識させることが必要だったのです。そのためには頼朝の死後、2代将軍頼家など出来るだけ早く源氏の血統を根絶やしする必要があったのだと思います。

②「武士の、武士による、武士のための政権」

大河ドラマの中で、このようなセリフが多く出てきたことを御記憶ですか？「俺たち（坂東武士）には源氏でも平家でも関係ない」というセリフです。その言葉の下に続くのが、おそらく「本領安堵されれば、どちらでも良い」ということです。坂東武士にとっての最大の関心事は、自分たちの領地が守られること、本領安堵だったわけで、それをしてくれる人は源氏でも平家でもどちらでも良かったのです。武士の、武士による、武士のための政権を求めていたのです。そのことは義時も十分に知っていたことで、父時政の暴走を抑え（追放）、義時は坂東武士の意見に沿った施政を行うことで信頼を勝ち得ていきます。そして自分たちの立ち位置は御家人側にあり、一緒に武家社会を持続させる（例えそれがポーズであったとしても）のだという立ち位置を貫いたのです。

北条氏には将軍職に就くような野心はなく、坂東武士の意向を大切に、鎌倉幕府をより強固にするために尽くしていくという意志を見せる必要がありました。また幕府を支えている御家人の一人であり、彼らを代表して役目についているという意志を明確にすることに腐心していったのです。これが北条義時が目指した「持続可能な武家社会」確立への戦略で、鎌倉幕府という枠組みの中で「執権北条氏」を長続きさせた所以だったのではないのでしょうか。（了）